

子ども国際理解サマースクール

田巻松雄（国際学部附属多文化公共圏センター長）

1. 事業の目的・意義

2018年8月8日と10日の2日間、宇都宮市教育委員会東生涯学習センターと国際学部附属多文化公共圏センターHANDS プロジェクト部門の協働で「子ども国際理解サマースクール」を実施した。

本事業は、HANDS としては9度目となる多文化共生教育実践である。今年も台風の影響で二日目の日程を急遽変更するハプニングが起きたものの、これまでの開催経験もあり、関係者の迅速な対応によって、一日ずらす日程で二日とも無事予定通り開催することが出来た。

受講者は、宇都宮市内の小学校4年生～6年生で、今年は例年よりも多くの子どもたちが応募し、参加者は35名となった。今回は中国をテーマにするという方針に基づき、多文化公共圏センターのコーディネーターである金英花が企画し、田巻が担当するグローバル・イシュー研究演習Ⅰの受講生22名が実践型授業の一環として参加した。

一日目は、中国をテーマに、子どもたちに隣国中国に目を向け、知る機会を作ろうとした。「4つのテーマと1つの実技」というプログラムを2部に分けて実践することとした。すなわち、中国を概要、歌と挨拶の言葉、ゲームとクイズ、試食と試飲という4つのテーマと身体でカンフーを体験するという内容で構成した。学生には4班に空けて各班ごとに担当のテーマを調べて、小学生の目線に合わせて工夫するように指示した。

二日目は、宇大の外国人学生による世界の国々との触れ合うプログラムを組んだ。今年もHANDS Jr や留学生、外国にルーツを持つ学生たちの企画と支援の下に推進したが、主な趣旨はかれらと身近に直接交流しながら、小学生に国際的な感覚を養わせることにある。例年と違うところは、「外国人留学生」から「外国人学生」に呼称を変えたことである。これは地域の国際化により、外国にルーツのある学生が増加していることにも気

づいてもらいという考えを反映したものである。

二日目のプログラムは、中国、韓国、ベトナム、香港、ペルー出身の外国人学生によるそれぞれの国の体験と遊びなどを取り入れた内容となった。

2. 事業内容

(1) 参加型講義

8月8日午前10時～昼食まで

テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう 2018～中国編～」

(2) 国際交流

8月10日午前10時～午後2時まで

テーマ「世界を感じよう 2018～宇大外国人学生たちとの交流～」

3. 事業の実施

一日目

まずは、中国について概要を学ぶことから始まり、挨拶の言葉、歌、クイズ、切り絵、面子作りという内容で、講義と自ら体験できる要素を盛り込んだことで、中国という国を肌で感じてもらえるように工夫した。子どもたちだけでなく、宇大生も資料準備から分かりやすく伝えるための班内での議論と役割分担を通じていろいろと学ぶことが出来たと思われる。休憩時間には参加者全員で中国のお菓子である「サチマ」の試食とアーモンド飲料杏任露（シンロンル）の試飲をした。慣れない味で大丈夫かなという心配は無用だった。みんな「おいしい、おいしい」と言っていた。休憩時間後は2部の活動、カンフー体験が始まった。県内在住の中国拳法の道場から高龍師範をお招きし、カンフーとは何かの説明から、柔軟運動に続いて簡単な蹴り技を教えていただいた。最後に高龍師範による酔拳の演舞は迫力があって、みんなが圧倒された。子どもたちの表情から、短い時間に中国について盛沢山の中国を肌で感じたことと

思われる。

二日目

「世界を感じよう」

二日目は、外国人学生とともに、中国、韓国、ベトナム、香港、ペルーの外国人学生と一緒に各国のことをいろいろと学び、体験した。まずは、各国の言葉で「じゃんけん列車ゲーム」を行った。肩に互いの手を載せて列を作る中で、子どもたち同士の打ち解けた感じが大きく広がった。次に各国の民族衣装を試着する時間があったが、子どもたちが積極的に着てみたい衣装や興味のある衣装を選んでいった。みんなで記念写真も撮影した。その後、ハンカチ落としの遊びの時にはみんな全力を尽くして鬼を追いかけ雰囲気が最高に盛り上がった。最後に習ったことをクイズ形式で復習するときには、すっかりうちとけて、互いにおしゃべりしながら、元気に満ち溢れていた。



4. 事業の成果

短い時間に多くのプログラムを入れすぎたかという心配はあったが、活動後のアンケートへの回答からは、1部に対しては、「今まで知らなかった中国のいろいろなことについて知ることが出来た。クイズ形式で楽しく学ぶことが出来た。同じ漢字でも日本と中国で意味が違ことに驚くとともに知識が広がった。面子、切り絵が楽しかった。カンフー体験は難しかったけど学校で出来ない体験が出来た。他の小学校の子どもと友達になった」等の回答があった。

2部に対しては、「クイズがポイント制だったことが楽しかった。外国の文化や食べ物などたくさん教えてもらい良い思い出になった。民族衣装を着たり見たりすることが出来て良かった。やさしく教えてくれたので良かった。大人になったらいろいろな国に行ってみたと思うようになった」等の回答があった。

閉校式では、宇都宮市東生涯学習センターの関係者、宇都宮大学側を代表して田巻がより挨拶を行った。解散後、学生や外国人学生たちに駆け寄ってあいさつしたり、握手をしたり、別れを名残惜しそうな児童たちを見て、この交流の目的を達成できたのではないかと思える。

今回のサマースクールは、今年度開講したグローバル・イシュー研究演習Ⅰの受講者を授業の一環として参加させた。改組後の国際学部教育では

従来よりも多文化公共圏センターとの協働を大きく打ち出しているが、その最初の試みでもあった。センターが長年取り組んでき HANDS 事業の1つに学生たちを参加させることで、学生たちに実践的な学びを提供することが出来たと言え、慌ただしかった2か月の準備は十分生かされスクールになったと言える。

参加小学生からは、本スクールに対して概ね高い評価が得られた。アンケート結果の内容等から、中国をテーマとする参加型授業と外国人学生との

交流事業に参加したことで、参加小学生の国際的な関心や国際感覚が大いに増大したと判断される。また、本学外国人学生と日本人学生は本スクールの企画・運営を担ったことで、実践的な国際理解教育を推進する力を向上させた。参観いただいた保護者の方々からも非常に有意義なイベントだとの評価をいただいた。

5. 今後の展望

多文化共生社会を推進するためには、受け入れ社会の国民の理解と寛容が必要不可欠である。しかしながら、国際的な視野と涵養は一日、二日で身に着くものではない。また、現在 HANDS プロジェクトが推進している外国人児童生徒への養育支援も現場の児童生徒たちや教師の理解と関心なしでは実現が難しい。こうした意味からも現場となる初等・中等教育でも日ごろからの国際理解教育はますます重要となってくる。しかし、学校単独での教育実践はなかなか進んでいないのが実情である。従って、この様なスクールの重要性は極めて高いといえる。参加者からは概ね高い評価を得ており、毎年リピーターも何人か出ている。この大きな理由は、学校現場での国際理解教育がまだ少ないことに加え、本スクールでは、大学と行政が協力連携しながら何度も協議を重ねて用意周到に計画を立て実施してきたことにある。また、近年、小学校でも英語教育が取り入れられ、アメリカをはじめとする英語圏の異文化理解や交流は進んでいるものの、英語圏以外、とりわけアジアの文化に目を向ける機会にはあまり恵まれていない小学生にとって、国際的な問題関心と国際感覚を養う貴重な場となっており、参加大学生にとっては実践的な国際理解教育を経験する貴重な場となっている。国際学部の学生・大学院生、外国人学生と学生団体 HANDS Jr の人的資源等を活かした効果的な地域貢献・人材育成事業となっており、今後も継続的に実施していきたい。